

Dorothy K. Billings,

Cargo Cult as Theater: Political Performance in the Pacific.

Lanham: Lexington Books, 2002, x + 267pp.

とよ だ ゆ き お
豊 田 由 貴 夫

はじめに

1964年2月、当時オーストラリアの信託統治領であったニューギニア島北東部のニューハノーバー島ラボンガイ（Lavongai）地域で、オーストラリア政府を戸惑わせる奇妙な事件が起こった。この年、ニューギニア地域の各地で自治政府の議員を選ぶ選挙が行われたのだが、これはこの地域で選挙というものが行われた初めての例であった。投票の結果、このラボンガイ地域の住民の票を最も多く集めたのは、当時のアメリカ合衆国の大統領であったL・B・ジョンソン氏だった。ジョンソン氏は候補者になっていないと説明する役人に対して、我々が望んでいるのはアメリカの大統領であり、我々はオーストラリア政府には税金を払わない、と島民は主張したのだった。

この事件は、その後ほぼ同じメンバーによって行われた協同組合運動をも含めてジョンソン・カルトと呼ばれ、メラネシア地域に特有のカーゴ・カルト^{（注1）}のひとつであるとされたのである。

本書はこのジョンソン・カルトを取り扱ったものであり、カルト発生後から長期間にわたって運動の参加者や関係者にインタビューを行い、約30年にわたって断続的に行われた調査の結果をもとにして著された書物である。著者はニューハノーバー島とニューアイルランド島との地域の文化の比較を主として行ってきた人類学者である。

I 本書の構成と意義

本書の構成は以下のようになっている。

序

第1部 インTRODakション

第1章 これまでの調査

第2章 フィールドワーク

第2部 インタビューと文献

第3章 ジョンソン・カルト

第3部 分析、解釈、結論

第4章 分析と解釈

第5章 理論——カルト、運動、儀式、文化——

第6章 政治的劇場としてのカーゴ・カルト

本書の意義は以下の3点に集約できると思われる。まず、ジョンソン・カルトの詳細な記述とその分析である。運動の参加者や多くの関係者にインタビューを行い、また運動の文献記録に丹念に当たりながら、どのようにして島民がそのような行動をとったのかを分析している。第2に、カーゴ・カルトに対する新たな視点の提示である。この運動を純粹にヨーロッパ人の富を求めるという意味でのカーゴ・カルトとして扱ってよいかは著者も疑問を示しているのだが、広い意味でのカーゴ・カルトであるとしたうえで、カーゴ・カルトを「劇場」として見る、という視点を提供している。第3はジョンソン・カルトを分析することにより、このようなカーゴ・カルトが発生する決定的な要因を示そうとしている。すなわち、ニューハノーバー島の隣の島であるニューアイルランド島にはジョンソン・カルトは波及しなかったことから、著者はニューハノーバー島のラボンガイ地域と、ニューアイルランド島のティカナ（Tikana）地域という2つの近接する社会の文化を比較することにより、なぜ特定の地域にはカーゴ・カルトのような運動が発生し、別の地域では発生しないのか、その要因を分析している。

II ジョンソン・カルト

以下、前述した本書の3点の意義について考えてみたい。

まずジョンソン・カルトに関する記述と分析であるが、著者によれば、島民がジョンソン氏に投票した理由は以下のように説明される。まず、住民を統治していた外国人は、最初はドイツ人（1884年から第1次世界大戦まではドイツ領）であり、その次にはイギリス人、そして最後にオーストラリア人（1920年よりオーストラリアの国連委任統治領）となった。しかし、住民の感覚的な理解によれば、オーストラリア人に統治を任せても自分たちの生活は一向によくならない、という思いがあった。住民の考え方はこうである。オーストラリア人は我々に読み書きを教えた。そうすればこの地域は発展して現金が入る、と言った。しかし英語を使えるようになって、我々の生活は豊かにはならなかった。次にはコーヒーを植えれば現金が入ると言った。しかしコーヒーは実らず、現金は入ってこなかった。オーストラリア人は嘘ばかりついている。それならば我々の地域の統治を誰に任せたらよいのか、と住民は考える。太平洋戦争中にやってきたアメリカ人はとても親切だった。よく我々にものをくれ、気前がよかった。さらに少し前に測量の調査でやはりアメリカ人がやってきたが、彼らもいい人たちだった。アメリカ人に任せれば、我々の生活はよくなるのではないか。住民がこう考えるのにそれほど無理はなかった。ではアメリカのボスは誰なのだ、という疑問がわいてくる。調べてみると、アメリカは大統領が国を治めていて、ケネディという大統領が殺されたばかりだという。その後にジョンソンという男が大統領になったらしい。このジョンソンに、我々の地域を任せたらよいのではないか。島民がジョンソン氏に投票した背景にはこのような論理があったと著者は分析している。

ジョンソン氏に投票した住民たちは、その後もアメリカの統治を望み、オーストラリア政府への税の支払いを拒否し続け、そのため何人かは投獄された。

この「カルト」のためにこの地域は危険であるとされ、実際、著者はこのジョンソン・カルトについて調査しようとしたのだが治安上の理由から調査許可が下りず、仕方なく隣接するニューアイルランド島を調査し続けるようになったのである。この地域に著者が入れるようになったのは、事件の後、3年がたってからであった。

住民たちはジョンソン氏の到来を待ち続け、ジョンソン氏は来ないと言い続けるオーストラリア政府の役人に対して、それならばジョンソン氏が自分たちの地域にやってくるための航空券を買おうと、オーストラリア政府に支払うべき税を自分たちで集め、その現金をジョンソン氏の航空券を買うために充てようとしたのであった。

住民たちのアメリカを待つ意識は次の運動に受け継がれていく。当時この地域で布教活動を行っていた宣教師は住民独自の産業を興そうと、協同組合運動を始めた。共同出資によって製材機を購入したり、製材を近くの町に運ぶためのモーターボートを購入して産業振興をはかった。ジョンソン氏に投票した人々とほぼ同じメンバーがこの運動に参加し、オーストラリア政府に反発を続けたため、この協同組合運動をも含めた運動がジョンソン・カルトと呼ばれたのである。

著者のジョンソン・カルトに関する説明は、運動の発生の原因を、住民の非合理的な判断に求めたり、特異な精神病理的な現象であるとせず、あくまでも当時の状況と住民の背景を考慮すればある程度当然の結果であるとしている点では、きわめて妥当な説明となっている。一部の研究者が主張するような特に不思議な神秘的な現象ではなく、また経済的に恵まれない人々による階級闘争でもないという説明は、他のカーゴ・カルトを直接、長期間にわたって調査した人類学者の結論と同じ方向性を持っている^(註2)。その意味では、これまで奇妙な現象として扱われていた事件を納得のいくように説明した、という点で評価してよいであろう。

ただし、その記述の仕方に対しては少し疑問も残る。本書では、第1章、第2章でカルトの概略が記述されるのだが、第3章で運動に参加した人々や関

係者の発言、文献資料を示すことにより、カルトの全貌を明らかにしようとしている。第3章の記述は、インタビューや文献資料をできるだけそのまま示そうとしており、特にインタビューは著者の質問も含めて会話すべてを直訳的に（この問題に関しては後で触れることにする）示す、という手法を採っている。

これはもちろん実証性を示す、という意味もあるだろうし、近年民族誌の書き方が問題視されることを意識しているのかもしれない。また、運動を行うようになった住民の論理を理解しようとするために、できるだけ会話を忠実に再現している、という意味もあるのだろう。ただし、第1部ですでに運動の概略が示されており、それがインタビューや文献の記述によりもう一度繰り返されるということになり、冗長な印象を与えてしまう。重要な部分に限定してインタビューの内容を示す、という記述の方が読者にはわかりやすかっただろう。

Ⅲ 劇場としてのカーゴ・カルト

次に本書の特徴となるのが、カーゴ・カルトに対する新たな視点の提供である。「劇場」としてカーゴ・カルトを見るという視点である。タイトルや本書の構成からは、この点が本書の中心となる印象を与えるのだが、残念ながらこの点について評者は著者の議論を十分理解できなかった。

著者によれば、ジョンソン・カルトは伝統的なラボンガイ文化を劇的に表現したものだという。それは既存の権威に抵抗するための、ひやかし、茶番、風刺などを使った即興の劇であり、政治的な劇場と見るべきだというのである。ジョンソン氏に投票したのは、オーストラリア政府を皮肉り、怒らせるために、住民が「演じた」ものなのだという。この「劇場」としての概念が有効であることを裏付けるものとして著者が挙げているのは、当時の行動に対する住民の態度（当時の場面を現在の住民が「笑いながら」話すことなど）、住民がジョンソン氏が実際に来ると信じていたかはインタビューでは疑問であること、などである。そしてジョンソン・カルトは「政

治的劇場」であるとし、実際、ジョンソン・カルトを幕・場面を示しながら演劇として記述することまで行っている。

しかし、この「劇場」としての概念はいわゆる「社会劇」の概念とは異なるのか、そしてこのような「劇場」としての視点でジョンソン・カルトを扱うことで何か新しいものが見えてくるのか、そもそも当時の住民は実際にジョンソン氏に来るとは考えておらず、それは演技であったとする説明が妥当か、など疑問はつきない。ジョンソン・カルトを演劇として記述することは記述の仕方としては面白いのだが、それ以上に意味を見いだせるかは疑問である。

Ⅳ カーゴ・カルト発生要因

本書の第3の意義は、カーゴ・カルト発生要因に関して議論がなされている点である。カーゴ・カルト発生要因としては、これまで様々な議論がなされてきた。すなわち、圧倒的な差を持つヨーロッパ文明との接触であるとか、それによって引き起こされる相対的な剥奪感であるとか、カリスマ的リーダーシップなどが要因として示されてきた。しかし、発生要因を決定的に論じることができないのは、それらの複数の要因からひとつの決定的な要因を取り出すことが難しいからである。様々に示される要因は、運動発生のひとつの要因にはなっても、それを決定的なものとすることはできない。つまり要因を孤立化することの難しさが絶えずつきまとうのである。

著者の扱った例は、この点では条件に恵まれている。すなわち、ニューハノーバー島のラボンガイ地域ではジョンソン・カルトが発生したのに対して、近隣のニューアイルランド島のティカナ地域には運動は波及せず、住民は冷ややかな目で運動を見ていたというのである。地理的にきわめて近接しており、また歴史的な条件もほぼ同じであるにもかかわらず、一方では運動が発生して他方には波及しなかった。長年、著者はニューハノーバー島とニューアイルランド島とを比較してきて、そこには文化的な違いがあると指摘してきた。著者はその文化的違いがカー

ゴ・カルトの発生を説明できるとするものである。

著者によれば、両地域の文化の差はこうなる。すなわちラボンガイ地域の文化は個人主義的な(individualistic)社会であり、これに対してティカナ地域の文化は集団志向的(group-oriented)な文化である。ラボンガイ地域では、個人がそれぞれ攻撃的に行動するのに対して、ティカナ地域では集団で行動し、社会を統合するように機能する儀礼(マランガン)が存在し、社会は制度化されている。カーゴ・カルトは個人主義的な社会を新しい信仰や主義、イデオロギーによって統合しようとするものであり、集団志向的な社会はそのようなものを必要としない。したがって、カーゴ・カルトは個人主義的な社会に発生し、集団志向的な社会には発生しないのだ、というのが著者の結論である。

この結論は、かなり大きな視点から見た場合、ある程度はあてはまるかもしれない。つまり、太平洋地域においては、ポリネシア、ミクロネシア地域ではカーゴ・カルトはほとんど発生しておらず、大部分はメラネシアで発生しているという状況がある。ポリネシア、ミクロネシアは首長が存在する階層的な社会であり、メラネシアでは生得的な社会的地位の差は存在しない、というのが一般的な理解である。その意味でポリネシア、ミクロネシアを集団志向的な社会とし、メラネシアを個人主義的な社会とするならば、著者の結論はあてはまることになる。

ただし、この集団志向的・個人主義的という区分がどれだけ有効か、これによって社会を厳密に区分できるかは、問題にすべきであろう。著者が裏付けに利用している理論は、文化とパーソナリティ論や文化様式論などであるが、どれも今となってはやや単純でありその分類は曖昧な性格が強い。ラボンガイ地域とティカナ地域の差は示されているが、はたしてそれが他の地域でも有効なのかは、それほど簡単に結論は出せないであろう。

V その他

最後に、以上の3点以外の問題点を指摘しておく。インタビューの記述が直訳的に行われているこ

とはすでに述べた。インタビューは原則として現地の共通語である tok-pisin (ピジン語)で行われているようで、録音されたものを翻訳しているらしい。tok-pisinでは語彙がほとんど英語から派生しており、単語ごとにそれが由来する英語の語彙を一々指摘できる。ただし、それを直訳的にもとの英語の単語をそのまま使って翻訳すると、意味が変わってしまう。著者はしばしばそのような訳し方をしているのだが、これに関しては疑問を示したい(注3)。このような訳し方は、tok-pisinを知っている者にとってはもとの文章が想像できるという利点はあるが、しかしこれは著者の tok-pisin の能力が不十分であるという印象を与えるだけでなく(それによって不利益を被るのは著者なのでその意味では特に問題にしくなくてもよいのだが)、現地住民の会話の内容が幼稚であるという印象を与えてしまう。いわば、片言の英語で表現されているようなもので、その表現が稚拙なことから(tok-pisinは現地ではほぼ母語に近い状況となっているので、そのもともとの表現が稚拙であるとは言えない)、話の内容や現地住民の思考まで幼稚であるという印象を与えてしまうのである。今回の書評は日本語で書いているので、この批評が著者本人に伝わるとは思えず、その意味では残念なのだが、現地住民の思考が幼稚であるかの印象を与えてしまう表記法にはあえて疑問を投げかけたい。

(注1) カーゴ・カルトは、19世紀末から20世紀にかけて、特に両大戦間の時期に、ニューギニアを中心とするメラネシアの各地域に数多く生じた運動である。これらの運動ではまもなくこの世に大異変が起こり、ヨーロッパ人の富(つまりはヨーロッパ人が船や飛行機で持ってくる積み荷、「カーゴ」)を満載した船あるいは飛行機が自分たちのもとにやってくると信じられた。

(注2) 例えばLawrence (1964) やBurridge (1960) など。

(注3) 例えば tok-pisin の “sanap” は英語の “stand up” に由来するのだが、「～の状態になっている」という意味で使われる時があり、それを “stand

up”と訳すと意味が変わってしまう。あるいは、トク・ピシンの“sindaun”は“sit down”に由来するが、意味は「～の状態にいる」となる。これを“sit down”と訳すと意味が変わってしまう。著者はこのような訳し方を多用しているのである。

文献リスト

- Burridge, K. 1960. *Mambu: A Study of Melanesian Cargo Movements and Their Ideological Background*. New York: Harper.
- Lawrence, P. 1964. *Road Belong Cargo*. Melbourne: Melbourne University Press.

(立教大学文学部教授)